

排除と包摂のあいだの社会福祉

本 多 敏 明^{*}

1. 排除の増大

「第1次のセーフティネット」ともいわれる雇用状況の悪化が進んでいる。総務省「労働力調査」によれば、2011年の完全失業率（年平均）は前年に比べ0.5%低下し改善がみられるものの4.5%（岩手県、宮城県、福島県を除く）となっており、完全失業者数は284万人を数える。雇用者（役員を除く）に占める「非正規の職員・従業員」の割合は35.2%と年々上昇している。さらに、国民年金の納付率（平成24年9月末現在）は54.4%、国民健康保険の一部でも滞納がある世帯（平成24年6月1日現在）は414.5万世帯で20.0%となっている。そして「最後のセーフティネット」である生活保護に関しては、過去最高の受給世帯数（2,131,011世帯）および受給者数（1,555,003人）にのぼっている（厚生労働省「被保護者調査（平成24年8月分概数）」）。

このような雇用情勢の悪化を主な理由として、失業や無保険など経済的貧困に脅かされる人びとが増えている。さらに1990年代以降、先進諸国において経済的貧困がそれ以外の社会生活にも負の影響を波及させる事態が現れてきている。あるひとつの社会関係（主として経済的関係）のつまずきが、他の社会関係のつまずきや破綻を誘発してしまう。そうした事態は、社会的排除（social exclusion）と呼ばれ、EUを中心とする社会政策や社会福祉の文脈で注目を集めている（阿部 2011；宮本 2009；中村 2007；岩田・西沢編 2005）。

こうした排除を最もよく表す例のひとつと考えられるのが、さいたま市でホームレス支援をしているNPO法人「ほっとポット」代表の藤田が紹介する次のケースである。少し長くながるが、引用したい。

おっちゃん [ホームレス男性] は元サラリーマン。ホームレス生活に至る前は、妻と息子2人の4人家族だったそうだ。話を聞けば、とても家族思いのようであった。仕事

^{*}コミュニティ政策学部 助教

は、ある地方銀行の支店長をしていたそうである。持ち家に住んでいて、車も持っていた。比較的裕福な生活だったようだ。しかし、支店長になってから仕事が忙しくなり、家族と話す時間が少なくなった。さらには、仕事のストレスと家族との不和が原因で、うつ病を患ってしまったという。そして、うつ病のために会社を休みがちになり、ついにはうつ病の治療をしながら通勤できる別の職場を求め、おっちゃんは銀行を退職したそうだ。

もちろん求職活動をいろいろとしてみたが、このご時世である。50歳を越えるおっちゃんに、再就職先はなかなか見つからない。探せば何でもあるはずだという人もいるが、実際のところ、銀行マンだった人が、いきなり建築や土木の肉体労働に就けるものではない。おっちゃんも力仕事に挑戦してみたこともあったが、体力がつかず、仕事のリズムもつかめず、3日とつづかなかったそうである。

(中略) そして、就職先が見つからず、アルコールから抜けられないおっちゃんは、家族と不仲になっていき、ついには離婚に追い込まれる。貯金のほとんどは妻に渡し、自分は家を出てアパートを借りて移り住んだという。しかし、仕事は見つからないまま……。やがてアパートの家賃を滞納することになり、大家から立ち退きの催促がくるようになった。銀行時代の友人や後輩からお金を借りたが、だんだんとお金を貸してくれる友人もいなくなっていく。借金を返せないと友だちとの縁も切れてしまうものだ。友人からも疎まれるようになり、消費者金融からの借金も膨らんでいった。

藤田・金子 (2010: 19-21。[] は引用者)。

こうして「おっちゃん」は、消費者金融からも逃げるようにアパートを飛び出し、ホームレスになったという。この例は、あるひとつの社会関係のつまずき(会社でうつ病を患うこと)が他の社会関係のつまずきや破綻(家族関係の崩壊、友人との絶縁、借金問題)を誘発していくことを示している。現代の日本では、こうしたホームレスの人数は約2万人と推定されている(厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査」(2007年))。この他にも同様の負の連鎖の帰結と捉えられてしかるべき、年間3万人を超える自殺者(警察庁「自殺の概要」)、約300人の児童虐待被害児童(警察庁「少年の補導及び保護の概況」)、15,000件を超える高齢者虐待(厚生労働省「高齢者虐待の防止などに関する調査」)および孤独死ないし孤立死など、現代日本は数々の重大な問題を抱えているばかりでなく、それらが複合していると見積もってもあながちの外れではないだろう。

日本では、1990年代半ば以降のいわゆる新自由主義的な路線をひた走る政策のもとで排除が増大する傾向が強まってきた。いわゆる「小泉改革」として典型的に表れた新自由主義的な政策路線は、世界的な規模で見れば、1991年のソ連の解体にもとづく米ソの冷戦構造の

崩壊によって対抗軸を失った資本主義社会が、社会主義に対抗するためにそれまで「福祉国家」という看板のもとに胚胎させていたさまざまな「社会主義的」要素（手厚い社会保険、安定的な雇用形態など）を吐き出し始めた過程とみることができる。「福祉国家とは、要するに、社会主義を排斥するために社会主義の改良主義的要素を内に取り込んで自己改造する資本主義の政治経済システム」（加藤 2006：299）であったが、もはやライバルのいない資本主義社会は、1990年代半ば以降、グローバリゼーションの道をさらに突き進んでいるといつてよい。

こうした排除に対抗する社会政策のキーワードとして社会的包摂（social inclusion）ないし包摂が謳われており、包摂を具体化するために就労支援を軸とするさまざまな政策が進められている（宮本 2009など）。こうしたなかで本稿では、以下でみていくように、現代社会の根本的な社会構造のしくみに焦点を当てる理論的視点から包摂と排除の問題に迫ったドイツの社会学者ニクラス・ルーマン（Niklas Luhmann, 1927-1998）の議論を追う。その結果として、現代社会における社会福祉が取り組む排除の現実と包摂の可能性を理論的な枠組みのもとで明らかにする手立てとしたい。

2. 包摂要請と排除の増大という現代社会のアンビヴァレンツ

ルーマンによると、機能分化（funktionale Differenzierung）を遂げた現代社会においては、多数の機能システムが分化している。たとえば、経済システム、法システム、政治システム、教育システム、科学システム、芸術システムなど社会の主要な機能システムはそれぞれ排他的にある特殊な機能を取り上げており、そうした主要な機能システムが並存している。それぞれの機能システムがひとつの機能に集中できるのは、それ以外の各機能システムがそれぞれ独自の機能を処理しているからである。そうした多種多様な機能システムのあいだには、どの機能システムが優位でどの機能システムが劣位であるという優劣関係は原則的にはみられないし、社会全体を一元的にコントロールできるような中心的な審級はもはや見出されえない。こうした機能分化した現代社会は、ルーマンによると、脱中心化した社会である。

こうした機能分化を遂げた現代社会が現出したのは長きにわたる社会の発展の結果であり、ルーマンによれば社会進化の帰結である。単純化して言えば、機能分化社会の現出は、それ以前の成層分化社会の限界の突破であった。成層分化社会においては、人びとがある家族に生まれたというその人の出自つまり出身階層によって、それぞれの人びとの人生行路がほぼ全面的に規定されていた。それに対して、機能分化した現代社会において、原則としては、人びとの出自のいかんにかかわらず、建前上はあらゆる人びとがあらゆる機能システムに参加する権利が認められており、事実かなりの数の人びとが自らの関心や意思に応じて多様な機能システムに参加している。もとより多種多様な機能システムに参加するためには、

個人はそれ相当の才覚を備えていなければならない。同時に、機能システムの側でもそうした能力を備えた個人であることを個々人に要求しているといつてよい。つまり、機能分化を遂げた現代社会は、かなりの能力を備えた個人が機能システムに参加することを前提にしており、その意味で個人が相当な能力を備え、それぞれ個性あふれる人になっており、つまりは個人化が求められている。人びとの個人化は機能分化した現代社会の、いわば構造的な要請といつてよい。こうしてみると、機能分化を遂げた現代社会においては、誰もがあらゆる機能システムに包摂されることが権利として認められているといえる。これら諸機能システムにあらゆる人びとが包摂されること (Vollinklusion) に関して、機能分化した現代社会は、成層分化社会よりもはるかに優れていることは論を待たない。機能分化した社会が設けている以上の包摂がなかなか考えられないことが機能分化社会の存在理由といつてよい。

したがって、機能分化した社会では相当の能力を備えた人びとは、例外なく、多種多様な機能システムに包摂されることが原則となっている。ところが、社会への全員の包摂 (Vollinklusion) が完全に実現されるとは到底考えられない。すべての人があらゆる機能システムに同等に包摂されるとはいえない。紛れもなく、経済システムにおいては不平等がみられ、したがって多数の人びとの低所得や貧困がますます生みだされている。この経済システムからの排除は、機能分化社会においても重大な問題を孕んでいる。というのは、経済システムからの排除は、その他の主要な機能システム (とくに教育システムや家族システム) からの排除を誘発するからである。先に「おっちゃん」の例でみたように、機能分化を遂げた現代社会におけるある機能システムからの排除は、他の機能システム (とくに教育システムや家族システム) からの排除を誘発してしまう。こうしてみると、機能分化した社会へのあらゆる人びとの包摂 (Vollinklusion) は、機能分化社会の理念として重要であるが、機能分化社会の構造レベルでは実現されていない。人びとが実際に平等に包摂されることは残念ながら不可能である。言い換えれば、現代社会においては、それぞれの機能システムにおける包摂要請 (Inklusionsgebot) が理念として掲げられながらも、いや掲げられているだけに、その理念が実現されない現状、つまり排除が際だっている。さらに言えば、それぞれの機能システムからみれば、各機能システムはそれぞれの存立を図るためにその機能システムにとって有用な人びとを包摂するが、有用でない人びとを排除する仕組みを内在させており、いわば機能分化を遂げた現代社会はその構造問題として排除を産出していると考えられるのである。このように機能分化を遂げた現代社会の構造的帰結として排除問題が生み出されていることに注目したい。現代社会には、機能分化社会における包摂要請と排除の問題のアンビヴァレンツが、突きつけられている。

万人の包摂 (Vollinklusion) を旨とする機能分化社会の包摂要請という理念が掲げられながらも現代の世界社会において数々存在する排除の問題の重大さにルーマンが気づいたの

は、残念ながら死の直前の晩年の数年間であった (Farzin 2006)。だが、ルーマンは、1990年代半ばから包摂／排除の問題に関する数々の注目すべき論文を発表している (Luhmann 1995 ; 1995b ; 1995d ; 1997)。「包摂と排除」論文 (1995) を中心とする晩年の諸論文において、ルーマンは現代社会においてかなりの数の人びとが排除されている現実を繰り返し指摘している。「まず第一に現実をみても、容易に次のことが突き止められる。すなわち、多数の国々において、とくに発展途上の国々において、さらにまたブラジルのようにすでに高度に工業化された社会において、さらにアメリカ合衆国においても限定された度合いにおいて、社会の住民のかなりの部分が排除という条件のもとで生活をなんとか続けているのである」 (Luhmann 1995 : 259)。ルーマンは、いわゆる発展途上国においてかなりの数の人びとが排除されているだけでなく、高度に工業化された国、とくに世界第一位の経済力を誇るアメリカの底辺においても排除が見出される事実を指摘している。ルーマンは、こうした排除の問題の重大さをとくに強調し、一方において少数の人びとだけが包摂される包摂領域が形成されるのに対して、大多数の排除される人びとが社会の多様な領域から排除されそこに固定される排除領域が形成される社会の根本的な隔絶が生み出されつつあることを指摘している。

包摂領域と排除領域との間にほとんど架橋できない裂け目が生じており、そのために社会というシステムの根本的な分化を進める機能が見られる傾向が存しているといっても決して過言ではない。詳しく言えば、社会の住民の大多数が、それぞれの機能システムの機能作用領域への参加からきわめて固定的に排除されているのであり、さらに排除領域と対峙している包摂領域においては予期されない安定化形式が設えられそれぞれの機能システムの機能領域にあずかるチャンスを寄生虫的に利用し、その結果として一方においては排除と排除のネットワークを作り出し、他方においては包摂と包摂のネットワークをそれぞれ作り出している。 (Luhmann 1995 : 250)

こうした排除領域におかれた者が包摂領域へと移動できる可能性はきわめて低く、誰彼の差別なしに社会に全員を包摂する (Vollinklusion) という現代社会の包摂要請には遠く及ばない現実が生じており、言い換えれば排除と排除が連動し固定化され結果として排除領域が形成されているといわざるをえない現実が現れている。

ここで、包摂と排除をルーマンがどのように定義しているのかを確認しておこう。「包摂は (したがって排除も)、人間がコミュニケーションに関連していることを言い表す仕方、つまり人間が、コミュニケーションにとって有意味な (relevant) 者とされる仕方に他ならない。人間という用語の伝統的な意味と関係づけていえば、人間が『パーソン』 (Person)

としてみなされる仕方が包摂であるということが出来る」(Luhmann 1995:241)⁽¹⁾。言い換えれば、包摂というのは、そのつどのコミュニケーションによって人間が尊重されること、つまりはコミュニケーション・システムのメンバーとして顧慮されることであり、それとは反対に排除はコミュニケーションにとって有意義な存在として顧慮されないことを表している。たとえば、所得を得る労働者として、または商品を購入する消費者としてそのつどの経済的なコミュニケーションにおいて明確な所在⁽²⁾を占めることが経済システムに包摂されるということである。それに対して、(経済システムにおける)排除は、貨幣を支払ったり支払われたりする経済的なコミュニケーションのメンバーとして(消費者として、あるいは労働者として)顧慮されない事態を言い表している。したがって、経済システムからの排除は、その人が所得を稼ぐことができないことや、商品を購入できないことといった排除された本人にとってみれば社会生活の重要な一側面が脅かされる事態を言い表している。その他にもたとえば、教育システムからの排除は教育を受ける者として顧慮されない(在学・在籍できない)ために、必要な知識や技術や資格を身につけることができない結果を招く事態を意味しているし、法システムからの排除は犯罪被害など法的権利が侵害されたさいに法的権利が守られるべき者として顧慮されることがかなわない事態を意味する。

現代社会では、各人の判断や決定をとおして、人びとはそれぞれ多様な機能システムに参加している。つまり、経済、政治、法、教育、家族、宗教、科学など多様な機能システムに包摂されることによってはじめて生活に必要なさまざまなニーズや欲求を満たすことが可能になっている。そうだとすれば、現代の機能分化社会では、数々の主要な機能システムに各人がしっかりと包摂されるかどうか個々人の生活にとって焦眉の問題となる。

そうであるにもかかわらず、こうした主要な機能システムへの包摂それ自体が問題を孕んでいることをまずは見定めなければならない。というのも、それぞれの主要な機能システムは、その機能システムの一員としての役割を担う力量を備えた人を包摂するという傾向を有しており、少なからぬ人びとが包摂要請を旨とする機能システムから排除されるという事態が出来しているからである。晩年のルーマンは、機能システムが自らの機能に即した合理性を追求するために人びとを不平等に扱っていることが、現代社会における大量の排除の不可避的な排出を強化していることを明言している。「世界社会のそれぞれの機能システムがそこに見出される不平等状態を典型的に強化しているのである。なぜなら、そうした機能システムにとっては、そうした[人びとの]相違を、つまり不平等状態を利用することが合理的だからである」(Luhmann 1995d:19。[]は引用者)。たとえば、経済システムにとっては、「支払い能力のある者だけが信用されて金を借りることができる。他方において、企業にとっては、低賃金諸国の労働を求めて、そこに企業が移動する」(Luhmann 1995d:19)。つまり、経済システムは、無職者よりも有職者を包摂するほうが、さらには仕事に必要な能

力が低い（「仕事ができない」）者よりも仕事の能力が高い（頭の回転が早く・人脈が広く・場を和ます影響力をもつ）者を包摂するほうが経済合理性の追求に有利なのであり、また企業はいわゆる先進国よりも発展途上国の低賃金労働者をあてにすることが経済合理性の追求に有利なのである。万人がさまざまな機能システムに包摂されることを可能にした機能分化を遂げた現代社会において、その理念とは裏腹にそれぞれの機能システムにおいて排除を生み出す傾向は、フックスによって、「排除偏流（Exklusionsdrift）」（Fuchs / Schneider 1995 : 209）と特徴づけられた。万人の包摂を理念とする現代社会において、現実には、排除に向かう傾向が強力にみられる。包摂要請を理念として掲げる機能分化を遂げた現代社会においてそれぞれの主要な機能システムにおいて例外なく排除が生み出される傾向をフックスは排除偏流と言いつけている。

しかも、排除の問題をさらに深刻なものにする特徴が機能分化という社会構造に孕まれている。それは、ある機能システムからの排除が他の機能システムからの排除をも誘発し、ある分野からの排除と他の分野からの排除が連動する「累積的排除」である。「あるひとつの機能システムから事実上排除されているということが他のシステムにおいて得られるものを制限してしまう——職がない、収入がない、身分証明書がない、安定した親密な関係を取り結んでいない、契約を結べない、裁判による権利保護を受けられない、選挙における政治キャンペーンをカーニバルの催しから区別できない、字が読めず医療と食料給付とを十分に受けられない——」（Luhmann 1997 : 630）といった排除が連動する問題である。前節で紹介した、ホームレスの「おっちゃん」が辿ってしまった道は、まさにこうした累積的排除であったし、低所得者や失業者は累積的排除の「予備軍」といえる。

以上のように、現代の排除の問題の特徴は、機能システムにおける排除偏流およびある機能システムからの排除が他の機能システムからの排除と連動する累積的排除の問題として際だって現れているように思われる。こうした問題が機能分化という社会構造のもとでどのようにして生じているのかが明らかにされたいうえで、いかなる解決の方途が可能なかが明らかにされなければならぬ。少なくとも、こうした排除の問題に対して社会福祉はどのような課題設定のもとにその援助の方向性を定めることができるのかが明らかにされなければならぬだろう。

3. 現代ドイツの Soziale Arbeit 研究における包摂／排除への注目

機能分化を遂げた現代社会では、個人がどのような生殖家族に生まれたか（包摂されたか）によって、その人がいかなる機能システムにどのように包摂されるか（学歴、職業、趣味、結婚相手）がかなりの影響を受けはするけれども、全面的に規定されるわけではなくなった。「巨万の富があるからといって、ほとんど自動的に政治的な影響力を持ったり、芸

術を解する力をもったり、愛に恵まれるということにはならない」(Luhmann 1995: 249)のである。つまり、機能分化した社会では、ある機能システムにおける包摂と別のある機能システムにおける包摂が互いに影響を及ぼす度合いはますます小さくなっている。というのも、「機能的に分化した近代社会は、社会構造的な理由によって、包摂を社会が一体となって規制することを断念せざるをえない。そうした近代社会は、包摂を規制することをそれぞれの機能システムに委ねている」(Luhmann 1995: 246)からである。このように、機能分化社会では、ある人間のある機能システムへの包摂が、その人間の他の機能システムへの包摂に対して原則的に直接的な影響を及ぼす関係にはない。ある機能システムの包摂とある機能システムの包摂の相互の結びつきの度合いは、緩やかなのである。

これに対して、排除の問題は逆の様相を呈している。ある機能システムからの排除は他の機能システムからの排除を誘発しているものであり、言い換えれば機能分化を遂げた現代社会における排除と排除の結びつきの度合いが緊密であることをルーマンは喝破している。「排除領域においては、包摂領域とは逆の様相が現れる。つまり、排除領域においては、社会は高度に統合されている」(Luhmann 1995: 259)のである。ここで通例の意味とは異なってルーマンが用いている統合(Integration)は「自由度の相互的制約」(Luhmann 1995: 238)を意味している。この排除領域は、機能分化によって生み出されているものの、「機能分化はその排除領域を整理することができない」のである(Luhmann 1995: 260)。というのは、それぞれの機能システムは包摂をおこなうばかりであって、排除された人に対しては無関心であり、他のいずれの機能システムもそれぞれの機能システムから排除された人に対しては構造的に無関心だからである。

それゆえ、機能分化社会では、排除の問題を各機能システムが自主的に解決することなど期待することはできないし、また社会全体を監督し排除を解決するような中心的な審級もありえないのである。「社会というシステムの機能分化によって、包摂と排除の関係の規制が機能システムへと移行し、もはやこの点で諸部分システムを監督しているようなそうした中心的な審級は存在しない」(Luhmann 1997: 630)。しばしば、政治システムがそのような中心的な審級の機能を果たしていると考えられることはあるが、政治システムでさえもそうした社会全体の舵取り役であるとはもはや考えられないのである(Luhmann 1981=ルーマン[徳安訳] 2007)。機能分化社会は、社会全体を一望的に俯瞰し、コントロールするような中枢的な審級を欠いているのであり、つまり「機能的に分化した全体社会は、頂点も中心もなしに作動する」(Luhmann 1997: 803=ルーマン[馬場ら訳] 2009: 1095)のである。

以上述べたとおり機能分化を遂げた現代社会の主要な機能システムにおける排除偏流および、それぞれの機能システムにおける排除の相乗効果としての累積的排除として総括される排除の問題は、残念ながら、それぞれの主要な機能システムが自律的に処理しうる範囲を越

え出た問題となっている。言い換えると、社会全体的なコントロールの中枢審級を欠いた機能分化という現代社会の社会構造ゆえに、現代社会における排除の問題の総体的な解決は不可能であることを晩年のルーマンは明確に認識していたといつてよい。いずれにしても機能分化のそれぞれの機能システムにおいて生じる排除問題が当該の機能システムによっては解消されえないのだとすればどうすればいいのか。現代ドイツにおいては、主要な機能システムにおける排除の問題を解決する新たな二次的な機能システムとして Soziale Arbeit (社会福祉) システムを捉える研究が続々と現れている。

現代のドイツでは、ソーシャルワーク、社会事業、社会教育の三者を総合している Soziale Arbeit をめぐる実践・学問領域が存在するが、この Soziale Arbeit をめぐる学問領域において、ソーシャルワークは単独でとりあげられているのではなく、社会事業や社会教育と関連づけられている。このようにソーシャルワーク、社会事業、社会教育の三つを構成因とする Soziale Arbeit 研究者たちの一部が1990年代から自らの理論的根拠を求めて、ルーマンの理論に熱い視線を送っている。すなわち、ルーマンの包摂／排除の概念、およびその「土台」たる機能分化社会論に依拠して、現代社会の社会福祉問題を捉えようとする Soziale Arbeit 研究者が数多く現れることになった(詳細については、阿部 2003)。その理由は、端的に言えば Soziale Arbeit の研究者たちが Soziale Arbeit を教導する理論的枠組みを求めているからであるといつてよい。ややおかげさによれば、ルーマン理論を手がかりとして21世紀における新しい社会福祉のあり方を模索しているように思われる。

いずれにしても、援助実践に取り組みその概念化に取り組みむ者たちが、ルーマン理論を手がかりとして、現代社会における Soziale Arbeit のあり方についての徹底考察を求めており、自らが当面する課題を少しでも果たそうとする姿勢がみてとれる。とりわけ一般にはルーマン理論といえば過度に抽象的な理論で援助実践に役立つ理論としてはどうてい考えられないという状況においては、こうしたドイツにおける Soziale Arbeit 研究者たちによるルーマン理論の一種の受容は了解されがたく、きわめて奇異な現象に映るかもしれない。ところが、ドイツの Soziale Arbeit 研究の一部においては、そうした印象を修正せざるをえないほど、ルーマン理論を援用して Soziale Arbeit 研究を進めようとする数多くの研究が現れつづけている。

そうした状況でハイコ・クレーヴェ (Heiko Kleve) という若手研究者は、21世紀の Soziale Arbeit のあり方を探求するにあたって早くからルーマン理論に取り組んでいる。とくにクレーヴェの『ポストモダンの Soziale Arbeit』(1999) という著作が注目されるのだが、クレーヴェの次の考え方は、Soziale Arbeit をめぐる論議のなかでなぜルーマン理論が注目されているのかを端的に示している。その本の献辞のなかでクレーヴェは、21世紀における Soziale Arbeit のあり方を探求するためにルーマン理論に注目したのは、結局のところこれまでの Soziale Arbeit 研究において現代社会のあり方についての考察があまりおこなわれてこな

かったからだ」と述べており (Kleve 1999: 9), クレーヴェには、現代社会と Soziale Arbeit の関係をしっかりと捉える理論の空白を埋める理論としてルーマン理論を援用しようとする態度を明確にみてとることができる (たとえば Kleve 1999: 184)。現代社会のありようを考察するルーマンの理論がこれからの21世紀の Soziale Arbeit のあり方を示しうる道標となりうるとする期待を、クレーヴェはここで表明しているとみられる。

いずれにしても、Soziale Arbeit は機能分化社会の派生問題としての排除問題を包摂へ転換しようとする社会的機能を有していることがドイツの Soziale Arbeit 研究において盛んに議論されている。こうした研究の気運は2000年以降も停滞することなく、むしろますます高まり、いまやルーマン理論をベースとした社会福祉研究がおびただしいほどに現れている。現代社会における社会福祉の一般的位置づけをめぐる議論が重ねられていた感の強い1990年代と比べると、2000年以降はより具体的なテーマに取り組む若手の研究者たちが陸続と現れている。とりわけ予防理論に取り組む M. ハフェン (2005)、障害者研究および組織研究に取り組む R. ヴェッツェル (2005)、精神障害者の研究に取り組む K. テルフロート、また (とくに宗教システムの) 包摂を取り上げる M. レーマン (2002) などが挙げられるし、その他にもルーマン理論と P. ブルデューの理論を土台に医療組織の研究に取り組む W. フォークド、医療や死の問題に取り組む I. ザーケなどが挙げられる。

ルーマンが現在注目されているようなかたちで包摂と排除を明確な概念ペアとして、つまり包摂／排除－図式として彫琢し始めた時期は1980年代の半ば以降であり (Farzin 2006: 13)、ルーマンが自らの理論の中心テーマに包摂／排除－図式を位置づけたのは生前のわずか数年にすぎなかったといつてよい。とはいえ、それ以前にルーマンが社会的不平等の問題に対して基本的に無知であったという批判は的はずれであろう (Merten / Scherr 2004: 8)。なぜなら、1985年の論文においてすでに階級理論ならびに階層社会学の問題を上げていたからである。「ルーマンの研究においては、包摂／排除の問題は後期の著作において中心的な位置を占めている。／ブラジルの貧民街 (ファーフエラ) に入って見たことを背景として、ルーマンはルーマン自身の人生において特別のショックを受け、言葉では言い尽くせないショックを受け、それをなんとか理論に活かそうとした」(Farzin 2006: 8。／は原文の改行箇所)。「ルーマンは、近代社会における大量の悲惨な状態という現象を知ってはじめて、彼の後期の著作において、包摂の対立概念としての排除の考察を始めている」(Farzin 2006: 11)。このようにルーマンは最晩年に包摂／排除を、とりわけ排除の考察に取り組んだのである。

もちろん、そうはいつても、ルーマン自身が包摂／排除の概念の可能性をまだ十分に表明しきれないままに亡くなってしまったという見方もできるのかもしれない。しかしながら、ルーマンの包摂／排除の概念は歴史のゴミ箱に捨てられることなく、むしろ多くの研究者に

受け継がれており、多様な研究の展開を鼓舞しつづけている。たしかに、包摂／排除の概念の重点が研究者ごとにさまざまに拡散している面がみられるし、また社会的不平等の問題に目を向けることができていないという批判的言明（Nassehi 2004）も現れているものの、こうしたルーマンの包摂／排除の概念を受容するにせよ批判するにせよ、多くの研究者が刺激されつづけていることは疑いえない。

4. 排除の問題を担う社会福祉

現代の排除の中核となる問題は各機能システムにおける排除偏流、および機能システムからの排除と他の機能システムからの排除が連動する累積的排除である。さらに、各機能システムが生み出している排除の問題をその機能システム自体では解決できないということを視野に入れたうえで、そうした機能システムに代わって排他的に処理する機能システムとして Soziale Arbeit システムが取り上げられていることを確認しておきたい。

つまり、それぞれの機能システムでは、そこで発生した排除の問題の解決が至難であるがゆえに、それに代わって代理的な包摂をおこなっているのが Soziale Arbeit という機能システムの役割なのである。そうだとすれば、当該の機能システムに代わって、社会への再包摂を促進する Soziale Arbeit システムの機能は、機能分化を遂げた現代社会の存立にとってきわめて大きな役割を果たしているといつてよいだろう。端的に言えば、機能分化を遂げた現代社会が、それ以外の分化形式の社会に変換できる見込みがほとんどないとするれば、機能分化を遂げた現代社会の存立を支える重要な機能を Soziale Arbeit システムが担っているといつてよいであろう。

ルーマン理論を理論的資源としている Soziale Arbeit 研究の現時点での頂点といえるマース（2008）の議論、とくに Soziale Arbeit の社会的機能に関する部分を最後に紹介したい。もちろん、マース以前にもさまざまな論者が Soziale Arbeit の社会的機能について議論を積み重ねてきた。たとえば、機能分化社会においては排除問題が生じていること、Soziale Arbeit の課題は再包摂であることという主に2点について述べられてきた。しかしながら、そのロジックの細部にまではあまり光が当てられてこなかったきらいは否めない。機能分化社会が排除を帰結しているとはいえ、どのようなロジックで排除を生み出しているか。また Soziale Arbeit が再包摂を課題としているとはいえ、どのようなロジックで再包摂を可能にしているのか。さらには、再包摂によってどのような問題が生じているのかなど、マースの議論は、これまでの Soziale Arbeit 研究をより深めより広めている。ここで取り上げるマース（2008）の論文が3部（全57章）構成という浩瀚なものゆえそのすべてを紹介することは筆者の能力を超えるため、これまでの Soziale Arbeit 研究が取り扱ってきた諸問題をよりクリアにすると考えられる部分に絞ることにしたい。

マースが自らの議論の軸に据えているのは、晩年のルーマンが強調していた、現代社会における包摂要請と排除の現実のアンビヴァレンツである。より詳しく言えば、現代社会は、誰彼の別なくあらゆる機能システムに参加できることという全員包摂 (Vollinklusion) の理念を支えとしているものの、そうした理念を掲げるがゆえに実際に機能分化の構造によって生じている排除を現代社会は許容することができなくなっているというアンビヴァレントな事態に直面している。「機能分化の成功とその存続は、あらゆる機能システムへのあらゆるアドレスの受取人になるという原理的な参加可能性と結びついているという前提を必ず満たすことにあることは疑われない。だからこそ包摂要請がおこなわれることになるのである。ところが、この包摂要請はそれぞれの機能システムの合理性と真っ向から反しているのである」(Maaß 2008: 66. 傍点はMaaß)。機能分化社会にとってその存立をかけて必要な包摂要請は、残念ながら、現実問題としてそれぞれの機能システムの存立根拠とまっこうから対立しており、そうした包摂要請に個々の機能システムがしたがえばその機能システムは「衰弱」していくしかなくなる。したがって、そうしたしくみの機能システムは、社会全体の心配をすることなど考えられず、仮にそうしてしまえば機能システム自体が壊滅しかねない。マースは、こうした包摂要請と排除現実のアンビヴァレンツという点をどの Soziale Arbeit 研究者よりも、明確に論じている。

このようにマースは、Soziale Arbeitの機能を明らかにするためには、現代社会の全員包摂という要請をしっかりと明記しなければならないと述べる。「社会に対する Soziale Arbeitの機能は、なによりもまず第一に、機能分化の包摂要請の必要性ということを基軸として記述されうる」(Maaß 2008: 63-64)。そのうえで、そうした包摂要請に鑑みると、「Soziale Arbeitの機能は、一般的な包摂 (general Inklusion) のチャンスの再形成として表される」(Maaß 2008: 63-64)。ここでの一般的な包摂というのは、多様な複数の機能システムにまんべんなく (再び) 包摂されるチャンスがひとり一人にとって可能になることという意味であろう。Soziale Arbeitの機能は、機能分化社会における包摂要請という基本的課題に応えることである。

再包摂のために Soziale Arbeitがおこなうことは、排除された人または包摂が脅かされている人の社会的環境を整えることであるとマースは述べている。排除された人そのものを直接的に変えることは、オートポイエーシス・システム理論からすると、理論的には不可能であるし、経験的にもできるとは考えられない。「Soziale Arbeitは —システム理論を基底に据えてみると—、例えば教育的努力あるいは治療的努力の場合のように、『人びと (Leuten)』または人間『それ自体 (Selbst)』に対して働きかけるものではなく、社会的アドレスが脅かされた場合にそのために必要な環境を整序する (Umweltarrangement) ことが Soziale Arbeitの機能であると考えられる」(Maaß 2008: 65)。したがって、たとえば、就職先を探す青年

に対してソーシャルワーカーができることは願書の書き方を教示する事であるとマースは述べる。

ある青少年が、養成専門教育企業の側から見習い勤務に就こうとしても拒否される場合に、Soziale Arbeitに何ができるかといえはまず第一に、その企業に加入するための書類をその青少年に手渡すことぐらいであるといつてよい。同時にソーシャルワーカーの支援は志願願書を記入するさいの支援へと拡大されうるし、人びとの心に訴えるような書き方が教示される。しかしながら、あらゆる外的な可能性をすべて尽くし、さらに就職の面接がうまくいくためのあらゆる準備が与えられることができるだけであって、その後でその志願が受け入れられるか否かは将来の雇用主の手に委ねられるし、さらに就職面接における相手を納得させようような青少年の会話能力に委ねられる。

(Maaß 2008 : 64)

Soziale Arbeitの機能が再包摂であるとしても、再包摂はいかにして可能か。また再包摂はどこに焦点を合わせる支援なのか。従来のSoziale Arbeit研究においては、Soziale Arbeitの機能が再包摂である点は語られてきたが、排除の危機にある人の社会的アドレスに焦点を合わせた再包摂であることをマースは明示的に述べている。排除に脅かされている人に対する再包摂をおこなう「Soziale Arbeitは、アドレス・アルバイト (Adressenarbeit) なのであり、このアドレス・アルバイトは包摂がおこなわれるためのいくつかの前提条件を適切にまとめ上げてその人の包摂をおこなわせたり、可能にさせたりすることなのである」(Maaß 2008 : 64-65)。たとえば、児童手当などの金銭的支援は、そうすることで当人が抱える支援の必要性のなかの財政的側面が支えられることであり、それによって「経済的なアドレス性が保証されることになる」(Maaß 2008 : 65)。

このように包摂要請に鑑みて、排除された人の社会的環境条件を整えるアドレス・アルバイトがSoziale Arbeitの機能である⁽³⁾。こうしたSoziale Arbeitの機能をマースは次のようにも表現している。「Soziale Arbeitは、[排除された人びとの]世話と付添い、人びとの治療や教育の媒介、財政的・物的支援およびその他多くのことがらを引き受けているのである。そのことに関連して、政治、経済、芸術または教育におけるアドレスの不具合を『ケア (Sorgen)』するのがSoziale Arbeitの課題だとされることになる。Soziale Arbeitのサービスに関してよく用いられるメタファーで言えば、Soziale Arbeitは、社会の『ゴミ問題を処理している (entsorgen)』」(Maaß 2008 : 66。[]は引用者)。Soziale Arbeitは、社会が活動していくうえで不可避免的に生み出さざるをえない「不要なもの」の「お掃除」を担当しているという見方をマースは提示している。いうまでもなく、ここでの「ゴミ」ないし「不要なも

の」というのは、排除された「人」を意味しているわけではない。機能分化社会が活動していくうえで、不可避免的に排除しなければならない「アドレス」を指しているのである（もちろん、アドレスが排除されるということは、その本人にとってみれば、自らの存在が社会にとってあたかも不要なものであると捉えざるをえないほどの心理的ダメージ、実存的な傷を与えることになるだろう）。

このように Soziale Arbeit の機能を捉えるマースは、機能システムからの排除がなぜ不可避であるかについての考察にも向かっている。マースが着目することは、機能分化社会においては包摂がどのようにおこなわれるのかがもはや全体社会的に調整できないという点である。前近代社会においては、ある人間が包摂される部分システム（環節ないし階層）はたったひとつであったがゆえに、誰がどの部分システムに包摂されるかは全体社会的に一義的に取り決められることであった。前近代社会においては、個人が自らが属する部分システムを自由に選べるわけではなかったのであった。それに対して、機能分化社会では、包摂をどのようにおこなうのかはそれぞれの部分システム（機能システム）に委ねられており、全体社会的な規制は不可能になっている。「いかなる包摂過程がいかなるアドレスに基づいて進められるかの規定を、近代社会は、部分システムに委ねている。この部分システムは包摂の条件に関するそれ自体の独自の規準を用いて〔包摂過程を〕処理している」（Maaß 2008：43-44。〔 〕は引用者）。

このそれぞれの機能システムは、ますます包摂を合理的に効率的に進めるために、そのつど包摂する人と排除する人を明確に区別している。ある人を包摂するということは、不可避免的に「その他の人」を排除するということである。近代社会は、ある人を自動的に包摂することがもはやできないがゆえに、機能システムごとに包摂される人と排除される人をそのつど選択しなければならないのである。ある企業が社員を採用（包摂）するための求人条件を「大卒以上、20歳以上40歳未満」として設定するということは、その条件に見合う者を包摂すると同時に、それ以外の者（たとえば高卒者、40歳以上の者）を排除することを宣言している。そのさい、企業は包摂した社員のちからを用いて経済活動に励むことができるだけであり、そのさい排除された者が生活していけるのか、他の就職先が見つかるか、就職先が見つかった場合にその企業はひどい搾取をする会社でないかなどに対してはなんらの責任もない。機能分化社会においては、構造的に、機能システムが社会の他の出来事に関心をもたないようになっている。「それぞれの機能システムは自主的なものとして分化しているのであり、メタファーを用いて言えば、社会の全体を見渡す『アンテナ』をもつ必要がないようなくみになっているからである」（Maaß 2008：66）。したがって、それぞれの機能システムにおけるそのコミュニケーションからの排除は、それを引き起こした当該の機能システムによっては食い止められえないのである。たとえば、「経済システムにとって重要な

は、……そもそも売ったり買ったりするさいの支払いと支払いが接続するかどうかだけが重要になってくる」(Maaf 2008:66) ののである。

それぞれの機能システムは、自らが特化する機能に専念しており、社会の他の機能システムにおける出来事については構造的に無関心である。現代社会では、包摂要請が理念として掲げられており、機能システムの包摂が建前上は保証されているはずなのだが、現実には排除が出来している。Soziale Arbeitは、包摂要請と現実の排除という現代社会のこうしたアンビヴァレンツの前に立たされているということをもマースは強調しているのである。

本論文で述べてきたSoziale Arbeitの社会的機能は、いうまでもなく社会全体にとってSoziale Arbeitがいかなる機能を果たしているかという、いわば一般化され抽象化された人間の機能性の面にかかわる議論であった。しかしながら、現代の社会福祉は「個別性の原則」を掲げていることに表れているように、人間ひとり一人の福祉の実現という高い要求を自らに課している。したがって、ひとり一人の個別性に配慮した社会福祉の包摂の論理が明らかにされなければならないのだが、その点については別稿に譲ることにしたい。

注

- (1) パースン (Person) は、ある個人に対して「……個人的に帰属される行動諸可能性の限定として定義される」(Luhmann 1995a:148) 概念である。別様に言えば、パースンは、ある個人が個別的・個性的な特性として備えていると期待されている、そうした諸期待の束である。
- (2) このコミュニケーションにおける「所在」というのは、言い換えればペーター・フックス(2003)の「社会的アドレス (soziale Adress)」を指している。
- (3) たとえばクレーヴェは、Soziale Arbeitの機能を包摂可能性の再活性化と書き留めていたが、マースのようにSoziale Arbeitが「アドレス」に焦点を当てている点は明確に述べられていない。「Soziale Arbeitは包摂をテーマ化する機能が割り当てられているとあってよいし、どのようにであれ社会的に排除されているパースンの代理的な包摂を越え出ようとして、さまざまな社会システム(たとえば経済、教育、健康システム、政治、法など)に関連するそのパースンの個人的な包摂可能性を再活性化する機能が割り当てられている」(Kleve 2000:61)。

文 献

- 阿部彩, 2011『弱者の居場所がない社会』講談社現代新書。
- 阿部孝志, 2003「ルーマン理論と Soziale Arbeit の問題」『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』10号, 39-54。
- Baecker, D., 2007, "Soziale Hilfe als Funktionssystem der Gesellschaft", in: ders., *Wozu Gesellschaft?*, Lambertus., S.206-236。
- Farzin, S., 2006, *Inklusion/Exklusion*, Transcript。
- Fuchs, P., 2000, "Systemtheorie und Soziale Arbeit", in: Merten, R. (Hrsg.), *Systemtheorie Soziale Arbeit: Neue Ansätze und veränderte Perspektiven*, Opladen: Leske+Budrich, 157-176。
- , 2003, *Der Eigen-Sinn des Bewusstseins. Die Person, die Psyche, die Signatur.*, Transcript。
- Fuchs, P./ Schneider, D., 1995, "Das Hauptmann-von-Körpenick-Syndrom. Überlegungen zur Zukunft funktionaler Differenzierung.", in: *Soziale Systeme* 1, S.203-224。
- Hadamek, C., 2007, *Wohlfahrtsstaat und Gesellschaft.* (Retrieved January 5, 2008, <http://www.ub.uit.no/munin/bitstream/handle/10037/1714/thesis.pdf?sequence=3>).
- Hafen, M., 2005, *Systemische Prävention*, Carl-Auer Verlag。

- 藤田孝典・金子充, 2010『反貧困のソーシャルワーク実践 NPO「ほっとポット」の挑戦』明石書店.
- 岩田正美・西澤晃彦編, 2005『貧困と社会的排除』ミネルヴァ書房.
- 加藤榮一, 2006『現代資本主義と福祉国家』ミネルヴァ書房.
- Kleve, H., 1999, *Postmoderne Sozialarbeit*, Aachen: Kersting.
- 厚生労働省, 2012「国民年金の納付率」(平成24年11月30日取得. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200002ppld-att/2r985200002pppc.pdf>).
- 厚生労働省, 2012「平成22年度国民健康保険(市町村)の財政状況」(平成24年4月5日取得. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000021uv8-att/2r9852000021uwp.pdf>).
- 厚生労働省, 2012「被保護者調査結果の概要」(平成24年11月30日取得. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/hihogosya/m2012/dl/08-01.pdf>).
- Lehmann, M., 2002, *Inklusion.*, Humanities Online.
- Luhmann, N., 1975, "Formen des Helfens im Wandel gesellschaftlicher Bedingungen", in: ders., *Soziologische Aufklärung Bd2*, Westdeutscher Verlag, S.134-149.
- , 1981, *Politische Theorie im Wohlfahrtsstaat*. Günter Orzug Verlag. = 2007, 徳安彰訳『福祉国家における政治理論』頸草書房.
- , 1984, *Soziale Systeme*, Suhrkamp. = (上) 1993 (下) 1995佐藤勉監訳『社会システム理論』恒星社厚生閣.
- , 1989, "Individuum, Individualität, Individualismus", in: ders., *Gesellschaftsstruktur und Semantik Bd3*, Suhrkamp, S.149-258.
- , 1995, "Inklusion und Exklusion", in: ders., *Soziologische Aufklärung Bd6*, Westdeutscher Verlag, S.237-264. = 2007, 村上淳一訳「インクルージョンとエクスクルージョン」『ポストヒューマンの人間論』東京大学出版会, 203-250.
- , 1995a, "Die Form "Person"", in: ders., *Soziologische Aufklärung 6*, Westdeutscher Verlag, S.142-154. = 2007, 村上淳一訳「『人格』という形式」『ポストヒューマンの人間論』東京大学出版会, 117-139.
- , 1995b, "Jenseits von Barbarei", in: ders., *Gesellschaftsstruktur und Semantik. Bd.4*, S.138-150.
- , 1995c, "Was ist Kommunikation?", in: ders., *Soziologische Aufklärung 6*, Westdeutscher Verlag, S.113-124.
- , 1995d, "Kausalität im Suden", in: *Soziale Systeme 1*, S.7-28.
- , 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, 2Bde., Suhrkamp. = 2009, 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会1・2』法政大学出版局.
- Maaß, O., 2008, *Soziale Arbeit als Funktionssystem der Gesellschaft?* (Retrieved December 22, 2008, <http://www.db-thueringen.de/servlets/DerivateServlet/Derivate-12856/Dissertation.pdf>).
- Merten, R./Scherr, A., 2004, "Inklusion/Exklusion Zum systematischen Stellenwert eines Duals innerhalb des Projekts "Systemtheorie Soziale Arbeit"", in: ders., (Hrsg.), *Inklusion und Exklusion in der Sozialen Arbeit*, VS Verlag., S.7-14.
- 宮本太郎, 2009『生活保障 排除しない社会へ』岩波新書.
- Nassehi, A., 2004, "Inklusion, Exklusion, Ungleichheit: Eine kleine theoretische Skizze", Thomas Schwinn (Hg.) *Differenzierung und Soziale Ungleichheit: Die zwei Soziologien und ihre Verknüpfung*, Humanities.
- 中村健吾, 2007「社会理論からみた『排除』」福原宏幸編『社会的排除／包摂と社会政策』法律文化社, 40-73.
- 佐藤勉, 2004a「ルーマン理論における排除個人性の問題」『淑徳大学社会学部研究紀要』第38号, 63-78.
- , 2004b「ルーマン理論における包摂の問題」『淑徳大学大学院研究紀要』第11号, 35-50.
- 総務省, 2012「平成23年労働力調査年報(詳細集計)」(平成24年11月20日取得. <http://www.stat.go.jp/data/roudou/report/2011/pdf/summary2.pdf>).
- Wetzell, R., 2004, *Eine Widerspenstige und keine Zählung*, Carl-Auer Verlag.

Social Welfare between Exclusion and Inclusion

HONDA, Toshiaki

Although modern society requests that everyone should be stably included in society, in fact exclusion is produced in modern society. Furthermore, exclusion that a failure in one certain socialrelation makes negative influence also affect the other socialrelation is increasing. According to German sociologist Niklas Luhmann, the modern society is faced with Ambivalent that requesting inclusion and actual exclusion. Social welfare aims at re-inclusion against the exclusion which is an unescapable conclusion of functional differentiation that is the modern society structure. Social inclusion is an important policy concern in Japan or EU in recent years. The modern social welfare must make the both sides of exclusion and inclusion a subject.

